

Congruency 現象と選択の強度

中 村 晴 美

“Congruency” and the Intensity of the Desire
of Selection in the Class Room

Harumi NAKAMURA

The aim of this research is to examine whether there is the close relationship between the intensity (or precedence) of the desire of attraction (or rejection) in sociometric test and the recognition of personal likes and dislikes directed to one from the other concerned, by comparing the cases in which “Congruency” arises according to the precedence of the desire of selection (or rejection).

The subjects of this research are eight classes of primary school pupils: two classes of second-year pupils, four classes of fourth-year pupils and two classes of sixth-year pupils.

The main result is that in proportion as the pupils get older more distinct relationship between the precedence of the desire of selection (or rejection) and “Congruency” can be seen and that in the case of attraction more distinct relationship can be seen than in the case of rejection.

序

人間の環境の中でもっとも重要なもの、すなわち、最初に知覚せねばならない重要な対象はいうまでもなく「他の人間」である。人間は絶えず、いろいろな他者といろいろな意味での対人的交互作用を行なう状況下におかれているといえるであろう。したがって、対人関係についてはこれまでも多くの研究がなされている。

歴史的にみた場合、ソシオメトリーの誕生およびその発展は、モレノ (J. L. Moreno) の名前と思想とに結びつけられる。1933年のソシオメトリー運動が展開された以降のことである¹⁾。以来、それが実践的かつ科学的方法であることから数多く用いられてきた。

対人選択における認知的側面の重要性は、1942年にモレノが示唆している。それが1950年に入ってから、R. Tagiuri が再論して以来、注目されはじめ、いくつかの実証的研究が発表された²⁾。

Tagiuri らは Sociometric choice と Expected choice との相互関係を主として分析し、対人感情の知覚の根本問題を体系的にとりあげた。彼は対人関係の分析的測度として

- 1) 他者の自分に対する対人感情を知覚する正確さ (Accuracy)
- 2) 他者に対する対人感情と他者から受ける実際の感情の一致度 (Mutuality)
- 3) 他者に対する対人感情と、その他者から受ける対人感情の認知の一致度 (Congruency)

の3つをあげた⁸⁾。これら3つの一致度は一般に偶然によって期待されるよりは大きな値となっていたが、中でも Congruency がもっとも重要な役割を果たしていることが明らかとなった。この Congruency 現象は自分が選択(排斥)する相手から選択(排斥)されると感じる傾向なのか、あるいは逆に、自分が選択(排斥)されていると感じる相手を選択(排斥)する傾向なのか、いいかえれば選択が認知を規定するのか、認知が選択を規定するかについて多くの研究がなされてきた。そして対人認知が選択を規定する結果(C. W. Backman & P. F. Secord 浜名外喜男)と、対人選択が認知を規定するという結果(I. E. Bender & A. H. Harstrof)が出ている⁹⁾。

以上が大きな流れである。

子どもたちは、集団生活の中で(友だちとの相互作用を通して)楽しくすごしたいと思うなら、友だち同志、欲求の調和をはかりながらも、自己主張ができなければならない。友だちとの相互作用から、子どもは社会生活における自己主張の重要性を身につけていくのである。

さらに、子どもは友だちとの相互作用を通して、社会生活に必要なさまざまな特性を獲得していく。第一に、社会のしくみや慣習、社会に必要な技術が習得される。第二に、社会に存在している種々な人間関係、他位や役割についての認識が深まる。第三に、社会生活、集団参加、対人交渉の技術の習得が促進される。このことは、要するに友だちは子どもの非パーソナリティーを社会的なパーソナリティーへの発達させるために、欠くことのできない存在であるということができよう¹⁰⁾。

子どもにとって、必要不可欠な存在である友だちは、自我の発達、性格形成にもとづいて、選択や排斥がみられるようになる。

これまで、ソシオメトリック・テストにおける選択の強度に関しては、安定性についての研究⁶⁾がなされているが、第2位より第1位は安定し、変動しにくいという研究²⁾は少ない。選択の順位は等閑視されているのである。

そこで本研究は、ソシオメトリック・テストにおける選択(排斥)の強度(順位)が、当該他者から向けられた対人的好悪感情の認知と関連をもつことを検討するため、選択(排斥)の順位ごとに Congruency 現象の生起している状況を比較することを目的とする。

方法及び手続

表 1. 対 象 数

1. 調査対象

対象は男子165名、女子148名、計313名であり、クラス別内訳は表1のようになる。なお亀田小学校は東京都内にある下町の小学校で、湯田小学校は鹿児島県下にある小さな温泉町の小学校である。

2. 調査期間

亀田小学校については、昭和47年9月20日から10月20日までに4クラス、また湯田小学校の4クラスについては、昭和47年9月29日と30日の両日に実施した。

3. 方 法

1) 質問紙

学校名	クラス名	男 子	女 子	合 計
亀田小学校	2年2組	22	17	39
	4年1組	14	22	36
	4年3組	12	21	33
	6年2組	22	19	41
	小 計	70名	79名	149名
湯田小学校	2年ろ組	19	21	40
	4年い組	24	17	41
	4年ろ組	22	20	42
	6年い組	30	11	41
	小 計	95名	69名	164名
合 計		165名	148名	313名

- i) 「教研式 田中ソシオメトリック・テスト」小学1・2・3年用, 4・5・6年用 (日本図書文化協会発行)
 - ii) 複合ソシオメトリック・テスト [「この組の中で、あなたとならびたい (あそびたい) と思っている人は、だれでしょう」(選択) と「この組の中で、あなたとならびたくない (あそびたくない) と思っている人は、だれでしょう」(排斥)] を作成
- 2) 手続

上記の質問紙を使用し、次のような指示を与え実施し、その後質問紙は回収した。指示は次のようである。

- i) テスト用紙に氏名を記入させ、性別を○でかこむよう指示する。
- ii) 「教研式 田中ソシオメトリック・テスト」を読みあげ、わからない点については質問をさせる。
- iii) 被調査者同志再認識する時間をもうける。なお回答が出ない子どもについては、「もう一度お友だちの顔を見てごらん下さい」と言い、他の被調査者の顔を見せる。ただし、その時まわりの友だちの回答を見たり、席を立つことは禁止した。
- iv) 回答の記入法については、5名を標準とし、強制することは避けた。「だれもいない」「男子全員」「女子全員」という場合も、それが真実であれば良いとした。
- v) 複合ソシオメトリック・テストを読みあげ、わからない点については質問をさせる。記入法については、手続iv)と同様であるが、2年生については1名でも良いとし、思いつかない時は、「わからない」「いない」と、はっきり書くよう指示し、白紙で回収しないようにする。
- vi) 調査結果は、担任教師と調査者が見るのみで、友だちには見せないということで安心感を抱かせるようにした。

3) 集計法

調査においては、被調査数を無制限ということで自由に書かせた。その結果、選択数・排斥数はさまざまであった。そこで整理上、第3選択・排斥までを分析の対象とした。

また、「だれでもよい」「みんな」「男全員」「女全員」という回答については『教研式 田中ソシオメトリック・テストの指針』の乱数表を用い、第3選択・排斥までを選出した。「とくにいない」「いない」「みんなちがう (排斥)」という回答については、選択者・排斥者はなしとみなし記入しない。「男の子はほとんど (排斥)」については、選択されている男子を除き、乱数表を用い選出した。

結果及び考察

I. 単純ソシオメトリック・テスト

ソシオメトリック・テストにおける選択・排斥の強度と Congruency の生起率との関連を明らかにするため、各順位ごとに Congruency と Incongruency の比によって表わすと表2から表5のようになる。

なお図1から図8までは、縦軸には選択・排斥の強度 (第1位から第3位) を取り、横軸には Congruency の生起率を取ったものである。

1. 学年別比較

学習場面の選択における学年別比較については、表2ならびに図1 (表2を図示したもの) に

表 2. 学習場面の選択

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二年	M	Cong.	19(51.35)	4(11.43)	11(42.31)
		Incong.	18(48.65)	31(88.57)	15(57.61)
	F	Cong.	10(25.64)	4(14.29)	7(24.14)
		Incong.	29(74.36)	24(85.71)	22(75.86)
	T	Cong.	29(38.16)	8(12.70)	18(32.73)
		Incong.	47(61.84)	55(87.30)	37(67.27)
四年	M	Cong.	24(30.38)	23(31.94)	15(24.19)
		Incong.	55(69.62)	49(68.06)	47(75.81)
	F	Cong.	37(50.00)	21(28.77)	8(14.03)
		Incong.	37(50.00)	52(71.23)	49(85.97)
	T	Cong.	61(39.87)	44(30.35)	23(19.33)
		Incong.	92(60.13)	101(69.65)	96(80.67)
六年	M	Cong.	32(61.54)	14(29.79)	10(22.73)
		Incong.	20(38.46)	33(70.21)	34(77.27)
	F	Cong.	21(70.00)	10(35.71)	11(40.74)
		Incong.	9(30.00)	18(64.29)	16(59.26)
	T	Cong.	53(64.63)	24(32.00)	21(29.58)
		Incong.	29(35.37)	51(68.00)	50(70.42)

表 3. 遊びの場面の選択

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二年	M	Cong.	15(37.50)	10(32.26)	7(31.82)
		Incong.	25(62.50)	21(67.74)	15(68.18)
	F	Cong.	15(38.46)	11(28.20)	8(29.63)
		Incong.	24(61.54)	28(71.80)	19(70.37)
	T	Cong.	30(37.98)	21(30.00)	15(30.61)
		Incong.	49(62.02)	49(70.00)	34(69.39)
四年	M	Cong.	26(34.67)	25(39.68)	19(32.76)
		Incong.	49(65.33)	38(60.32)	39(67.24)
	F	Cong.	27(35.53)	20(29.41)	7(13.73)
		Incong.	49(64.47)	48(70.59)	44(86.27)
	T	Cong.	53(35.10)	45(34.35)	26(23.86)
		Incong.	98(64.90)	86(65.65)	83(86.14)
六年	M	Cong.	30(60.00)	17(36.17)	12(33.33)
		Incong.	20(40.00)	30(63.83)	24(66.67)
	F	Cong.	15(48.39)	14(43.75)	14(41.18)
		Incong.	16(51.61)	18(56.25)	20(58.82)
	T	Cong.	45(55.56)	31(39.24)	26(37.14)
		Incong.	36(44.44)	48(60.76)	44(62.86)

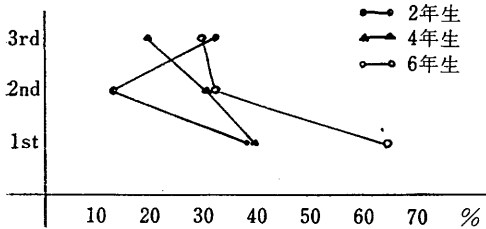


図 1. 学習場面の選択についての学年別比較

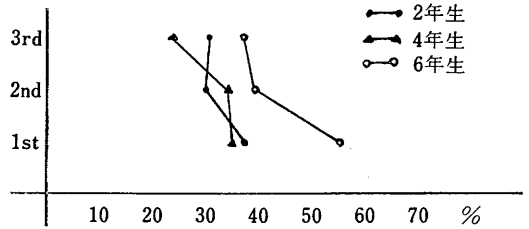


図 2. 遊びの場面の選択についての学年別比較

表 4. 学習場面の排斥

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二年	M	Cong.	5(10.00)	1(2.13)	5(12.50)
		Incong.	45(90.00)	46(97.87)	35(87.50)
	F	Cong.	5(17.86)	2(7.69)	0(0.00)
		Incong.	23(82.14)	24(92.31)	18(100.00)
	T	Cong.	10(12.82)	3(4.11)	5(8.62)
		Incong.	68(87.18)	70(95.89)	53(91.38)
四年	M	Cong.	9(10.11)	6(7.59)	3(5.08)
		Incong.	80(89.89)	73(92.41)	56(94.92)
	F	Cong.	6(10.17)	5(9.43)	7(14.58)
		Incong.	53(89.83)	48(90.57)	41(85.42)
	T	Cong.	15(10.14)	11(8.33)	10(9.35)
		Incong.	133(89.86)	121(91.67)	97(90.65)
六年	M	Cong.	24(51.06)	11(28.95)	10(31.25)
		Incong.	23(48.97)	27(71.05)	22(68.75)
	F	Cong.	5(12.50)	7(16.28)	3(9.38)
		Incong.	25(87.50)	36(83.72)	29(90.62)
	T	Cong.	29(33.33)	18(22.22)	13(20.31)
		Incong.	58(66.67)	63(77.78)	51(79.69)

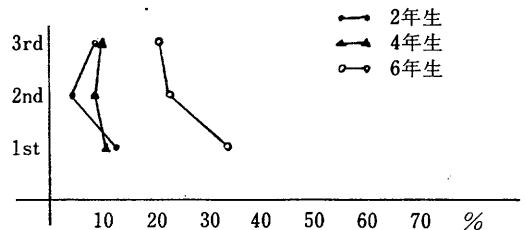


図 3. 学習場面の排斥についての学年別比較

示すように、2年生では Congruency の生起率と順位の間連はみられないが、4年生・6年生と学年が上がるほど間連がはっきりしてくる。また、遊びの場面の選択においての学年別比較については表3ならびに図2(表3を図示したものに)示すように、学年が上がるほど Congruency の生起率と順位の間連がみられる。これは成長するにしたがい周囲の人々との人間関係を正しく知覚していくことのあらわれであると思われる。また両場面、特に6年生においては、第1位と第2位の差は、はっきりしているが、第2位と第3位の順位差は前者に比べ少ない。

表4ならびに図3に示すように、学習場面の排斥の学年別比較については、6年生のみが Con-

表 5. 遊びの場面の排斥

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二年	M	Cong.	5(8.77)	5(12.20)	1(4.00)
		Incong.	52(91.13)	36(87.80)	24(96.00)
	F	Cong.	1(4.35)	1(6.25)	1(5.88)
		Incong.	22(95.65)	15(93.75)	16(94.12)
	T	Cong.	6(7.50)	6(10.53)	2(4.76)
		Incong.	74(92.50)	51(89.47)	40(95.24)
四年	M	Cong.	9(12.68)	6(12.00)	2(4.54)
		Incong.	62(87.32)	44(88.00)	42(95.46)
	F	Cong.	10(14.49)	3(5.77)	4(13.33)
		Incong.	59(85.51)	49(94.23)	26(86.67)
	T	Cong.	19(13.57)	9(8.82)	6(8.11)
		Incong.	121(86.43)	93(91.18)	68(91.89)
六年	M	Cong.	0(0.00)	3(25.00)	0(0.00)
		Incong.	27(100.00)	9(75.00)	8(100.00)
	F	Cong.	7(13.46)	1(2.50)	3(10.71)
		Incong.	45(86.54)	39(97.50)	25(89.29)
	T	Cong.	7(8.86)	4(7.61)	3(8.33)
		Incong.	72(91.14)	48(92.31)	33(91.67)

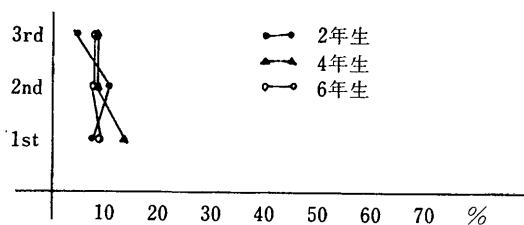


図 4. 遊びの場面の排斥についての学年別比較

gruency の生起率と順位との関連がみられる。しかし、その Congruency の生起率も両場面の選択に比べると非常に低い。

遊びの場面の排斥についての学年別比較については、表 5・図 4 で示すように、3 学年共に 10%前後の Congruency の生起率しかなく、順位との関連は 4 年生にしかみられない。

学習場面と遊びの場面を通して言えることは、Congruency の生起率が非常に低いこと。2 年生では両場面とも見られなかった Congruency の生起率と順位との関連が、4 年生では遊びの場面に、6 年生では学習場面に見られ、Congruency の生起率も他の学年より、わずかではあるが高い。これは友だちの見方が変化していく様子を示しているように思われる。

2. 性差による比較

学習場面・遊びの場面の選択における性差については図 5 に示すように、順位が上がるごとに Congruency の生起率も上がっている。特に遊びの場面では直線に近い勾配であり、男子の方が 4~7%高いが男女よく似た勾配を示している。学習場面では第 1 位と第 2 位の差に比

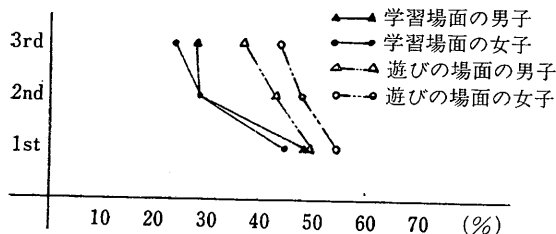


図 5. 学習・遊びの場面の選択

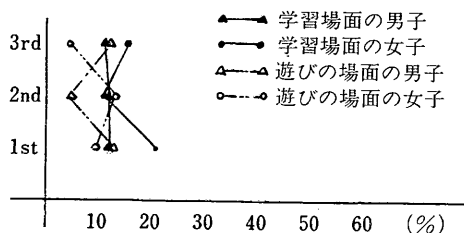


図 6. 学習・遊びの場面の排斥

べ、第 2 位と第 3 位の差が男女共に少ない。

両場面の排斥は図 6 に示されるように、Congruency の生起率と順位との関連は見られない。また Congruency の生起率も非常に低い。

被排斥数は遊びの場面では男女同数であるのに対し、学習場面においては、男子が女子の 2 倍になっている。これは、ふだんの学習態度の悪さなどに起因しているものと思われる。

3. 学習場面と遊びの場面みる男女別選択と排斥の比較

男女共に選択と排斥の差がはっきり出ている。つまり図 7・8 で示すように、排斥における Congruency の生起率は低く 21%が最高、一方選択の方では 47%が最高で、最低でも 23%と排斥の最高より高い。つまり、好感情の方が一致度が高いといえる。また、選択の方では順位が上がるほど Congruency の生起率も上がっているのに対し、排斥の方ではその現象は見られない。

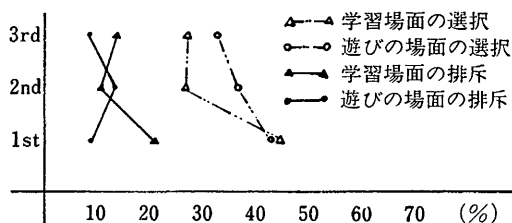


図 7. 学習・遊びの場面にみる男子の選択と排斥の比較

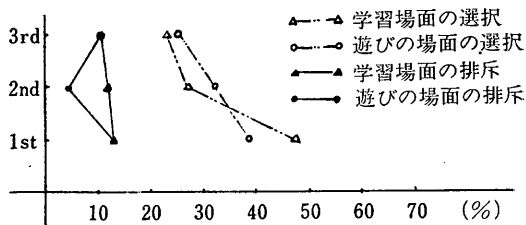


図 8. 学習・遊びの場面にみる女子の選択と排斥の比較

II. 複合ソシオメトリック・テスト

Mutuality 事態——選択者と被選択者の相互間の感情が一致している場合——での順位と Congruency の生起率の関連を明らかにするため、Congruency と Incongruency の比を各順位ごとに表わすと表 6 から表 9 になる。

1. 学年別比較

表 6. 学習場面の選択

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二年	M	Cong.	2(11.77)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	15(88.23)	8(100.00)	9(100.00)
	F	Cong.	2(15.39)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	11(84.61)	15(100.00)	27(100.00)
	T	Cong.	4(13.33)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	26(86.67)	23(100.00)	36(100.00)
四年	M	Cong.	9(20.93)	5(15.63)	4(18.18)
		Incong.	34(79.07)	27(84.37)	18(81.82)
	F	Cong.	1(2.70)	2(5.00)	0(0.00)
		Incong.	36(97.30)	38(95.00)	27(100.00)
	T	Cong.	10(12.50)	7(9.72)	4(8.32)
		Incong.	70(87.50)	65(90.28)	45(91.68)
六年	M	Cong.	6(26.10)	0(0.00)	2(20.00)
		Incong.	17(74.90)	17(100.00)	8(80.00)
	F	Cong.	2(16.70)	3(27.30)	1(14.30)
		Incong.	10(83.30)	8(72.70)	6(85.70)
	T	Cong.	8(22.90)	3(10.71)	3(17.60)
		Incong.	27(77.10)	25(89.29)	14(82.40)

表 7. 遊びの場面の選択

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二年	M	Cong.	3(16.67)	1(9.09)	0(0.00)
		Incong.	15(83.33)	10(90.91)	7(100.00)
	F	Cong.	0(0.00)	2(20.00)	0(0.00)
		Incong.	21(100.00)	8(80.00)	4(100.00)
	T	Cong.	3(7.69)	3(14.29)	0(0.00)
		Incong.	36(92.31)	18(85.71)	11(100.00)
四年	M	Cong.	9(20.90)	2(9.09)	1(4.80)
		Incong.	34(79.10)	20(90.91)	20(95.20)
	F	Cong.	4(11.10)	1(2.90)	0(0.00)
		Incong.	32(88.90)	33(97.10)	28(100.00)
	T	Cong.	13(16.50)	3(5.40)	1(2.00)
		Incong.	66(83.50)	53(94.60)	48(98.00)
六年	M	Cong.	8(27.60)	2(10.00)	2(15.40)
		Incong.	21(72.40)	18(90.00)	11(84.60)
	F	Cong.	6(46.20)	1(7.70)	1(12.50)
		Incong.	7(53.80)	12(92.30)	7(87.50)
	T	Cong.	14(33.33)	3(9.09)	3(14.28)
		Incong.	28(66.67)	30(90.91)	18(85.72)

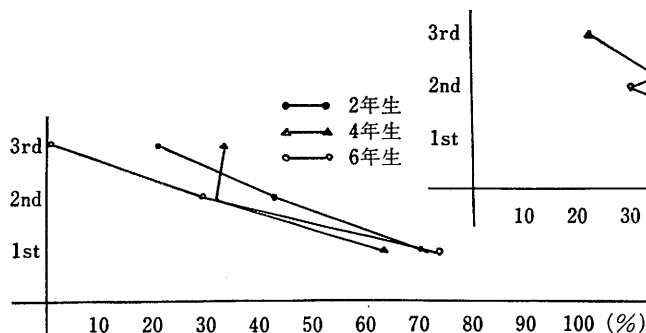


図 9. 学習場面の選択における学年別比較

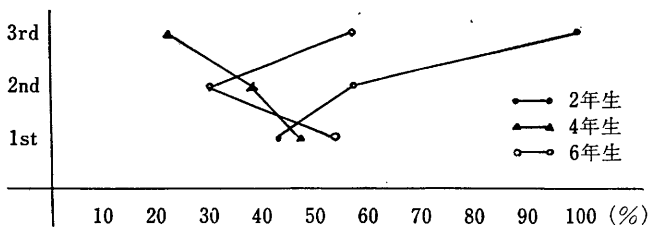


図 10. 遊びの場面の選択における学年別比較

中村：Congruency 現象と選択の強度

学習場面・遊びの場面の選択におけるの学年別比較については、図 7・8 ならびに表 6・7 が示すように、学習場面でわずかに Congruency の生起率と順位に関連がみられる。両場面の排斥における学年別比較については、表 8・9 ならびに図 9・10 の示すように、Congruency の生起率と順位との関連は見られない。被排斥数が少なく Congruency の生起率が低い。被排斥数（自分を嫌っている人数）が女子の方が多く、女子の方に劣等意識が強いのではないと思われる。

表 8. 学習場面の排斥

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二 年 年	M	Cong.	1(5.00)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	19(95.00)	14(100.00)	5(100.00)
	F	Cong.	2(7.69)	1(7.14)	0(0.00)
		Incong.	24(92.31)	13(92.86)	11(100.00)
	T	Cong.	3(6.50)	1(3.57)	0(0.00)
		Incong.	43(43.50)	27(96.43)	16(100.00)
四 年 年	M	Cong.	1(2.10)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	47(97.90)	36(100.00)	24(100.00)
	F	Cong.	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	59(100.00)	38(100.00)	28(100.00)
	T	Cong.	1(0.90)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	106(99.10)	74(100.00)	52(100.00)
六 年 年	M	Cong.	2(4.30)	4(12.10)	1(4.00)
		Incong.	44(95.70)	29(87.90)	24(96.00)
	F	Cong.	2(10.00)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	18(90.00)	21(100.00)	20(100.00)
	T	Cong.	4(6.10)	4(2.20)	1(2.20)
		Incong.	62(93.90)	50(97.80)	44(97.80)

表 9. 遊びの場面の排斥

Grade	Sex	Rank	1st	2nd	3rd
二 年 年	M	Cong.	1(3.23)	0(0.00)	1(20.00)
		Incong.	30(96.77)	9(100.00)	4(80.00)
	F	Cong.	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	24(100.00)	17(100.00)	12(100.00)
	T	Cong.	1(1.82)	0(0.00)	1(5.88)
		Incong.	54(98.18)	26(100.00)	16(94.12)
四 年 年	M	Cong.	1(1.82)	0(0.00)	0(0.00)
		Incong.	54(98.18)	39(100.00)	26(100.00)
	F	Cong.	3(6.40)	1(3.20)	0(0.00)
		Incong.	44(93.60)	30(96.80)	19(100.00)
	T	Cong.	4(3.90)	1(1.40)	0(0.00)
		Incong.	98(96.10)	69(98.60)	45(100.00)
六 年 年	M	Cong.	0(0.00)	1(4.30)	0(0.00)
		Incong.	41(100.00)	22(95.70)	19(100.00)
	F	Cong.	2(9.10)	0(0.00)	1(8.30)
		Incong.	20(90.90)	18(100.00)	11(91.70)
	T	Cong.	2(3.20)	1(2.40)	1(3.23)
		Incong.	61(96.80)	40(97.60)	30(96.79)

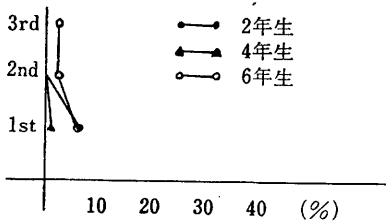


図 11. 学習場面の排斥における学年別比較

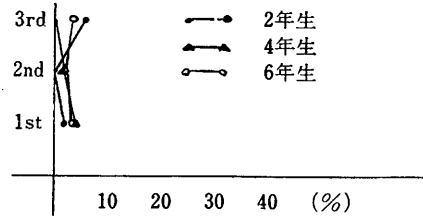


図 12. 遊びの場面の排斥における学年別比較

2. 性差による比較

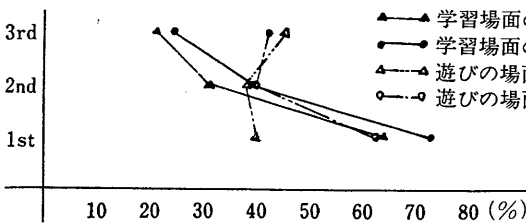


図 13. 学習・遊びの場面の選択

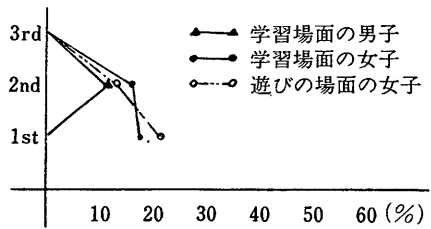


図 14. 学習・遊びの場面の排斥

単純ソシオメトリック・テストの Congruency の生起率と似た結果が出た。Mutuality 事態の方が最低と最高の差が大きい。単純ソシオメトリック・テストにおいては全般的に男子の方が Congruency の生起率が高いのに対し、Mutuality 事態では女子の方が高い。(図 11, 12) つまり、相

3. 学習場面と遊びの場面にみる男女別選択と排斥の比較

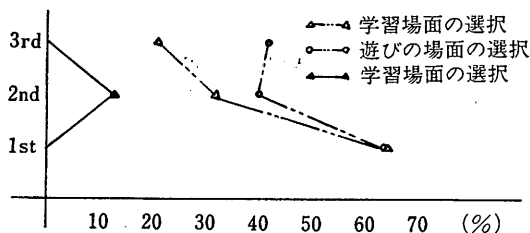


図15. 学習・遊びの場面にみる男子の選択と排斥の比較

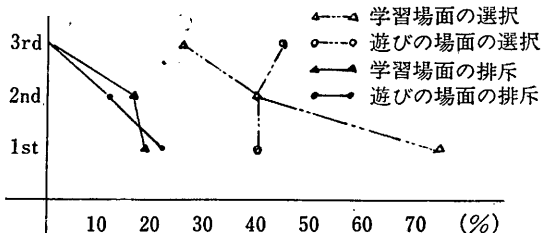


図16. 学習・遊びの場面にみる女子の選択と排斥の比較

手に対する自分の好悪感情と、自分に対する相手の好悪感情が一致すれば、その相手から自分に向けられた好悪感情が一致する傾向が強いといえる。

図13・14に示すように、図の右側に両場面の選択、左側に排斥とはっきり分れている。つまり、Congruencyの生起率は選択の方が高く、排斥は低い。またCongruencyの生起率の最高と最低の差も選択の方が大きい。すなわち順位差がよりはっきりしているといえる。

要 約

本研究ではソシオメトリック・テストにおける選択及び排斥の強度と、自分に向けられた好悪感情の認知との関連があることを検討したが、結果は以下のように要約される。

- 1) 学年別比較については、選択・排斥ともに順位が上がればCongruencyの生起率も上がるという現象は2年生には見られないが、学年が上がるにつれ、その現象は顕著になってくる。
- 2) 性差による比較については、学習場面・遊びの場面の選択は男女よく似た傾向を示し、順位が上がるに従いCongruencyの生起率も上がっている。一方、排斥の方では両場面の男女とも生起率が低く、Congruencyの生起率と順位との関連は、はっきりと見ることはできない。
- 3) 選択と排斥の比較では、Congruencyの生起率は圧倒的に選択の方が高い。選択ではCongruencyの生起率と順位の間接は見られるが、排斥の方では、その現象は見られない。
- 4) Mutuality事態については、その現象自体数が少ない。よって一般化することはできないが、その低生起率の中でも学習場面の選択・遊びの場面の排斥の男女にCongruencyの生起率と順位の間接を見ることができるといえる。

学年を限定し対象者数をふやし研究を進めた方が、より一般的なものが見られたであろうし、質問紙の回答についても、具体的に書かせた方がより確実な資料が得られたであろう。また、性差による比較などにおいては担任教師に日常の様子など聞き、参考にするとよかったであろう。

引 用 文 献

- 1) 大橋正夫：選択行動と対人的知覚の研究，心理学研究，27巻3号，36（1956）
- 2) 吉森護：対人認知と選択の強度，広島大学教育学部紀要，14巻，169（1965）
- 3) 山本都久：対人関係の知覚と対人認知構造，広島大学教育学部紀要，15巻，93（1966）
- 4) 浜名外喜男：対人知覚におけるCongruency現象の規定要因に関する実験的研究，広島大学大学院教育学研究科修士論文抄，10巻，39-43（1964）
- 5) 高田清純：ひとりっ子の友だちづくりへの指導，児童心理，25巻3号，72，金子書房（1971）
- 6) 上田敏美：児童の社会測定的地位の安定性に関する研究，教育心理学研究，12巻1号，20-27（1964）